

プロフェッショナル

福永の流儀

地方における情報伝達とその課題

高知県安芸福祉保健所 福永一郎



人生裏街道

略 歴

臨床医、大学研究者、行政医、
会社経営者(フリー)を全て経
験しています

広島県呉市出身

1987年岡山大学卒業

耳鼻咽喉科医を経て、公衆衛生領域に転身

1990年香川医科大学助手、1993年香川県保健所勤務(役職なし)

1997年 博士(医学)

1999年香川医科大学助教授(衛生・公衆衛生学)

2003年コンサルタント会社を起業。保健計画総合研究所(香川県坂
出市)所長。あわせて臨床従事。市町村保健センター医師兼務

2009年6月 財団法人正光会(愛媛県宇和島市)精神衛生研究所副
所長

2009年12月高知県に奉職、須崎保健所保健監、健康政策部健康対
策課長を経て2016年から現職

社会医学系専門医・指導医

全国保健所長会 副会長(2018年10月~1年間)

若い頃は、プライベートタイムで障がいやHIV関係のボランティア・

NPO法人運営等の活動経験多数



人生裏街道

第1波の状況

令和2年3月、高知県安芸福祉保健所管内において、すさまじい誹謗中傷、差別偏見と風評被害が発生した。

下記資料参照ください

令和2年度保健所連携推進会議
(中四国ブロック)資料集より

第3波における風評被害

複数の感染した方が、飲食店を頻回に利用していたという情報が拡散された。

利用していたと推定された飲食店はもとより、同じエリアの他の飲食店に至るまで、「一般市民」からの「営業しても良いのか」という攻撃が起こり、少なからぬ飲食店が休業に追い込まれた。

感染した人(あるいは家族)からの情報発信

・感染した人(あるいは家族)は、感染した(あるいは検査中)という情報を、必要と思う人、機関には伝えていることが多い(保健所がききとるより先に伝えている場合もある。また、ききとりで保健所が把握していない相手方もある)

学校、勤務先

接触した人(行動を共にした人)・・・友人、知人など

▼ ただし、自分が利用したお店や、公共機関に伝えている事例は経験していない

▼ たいていは、近所・隣人にも伝えていない

・必要と思う人にはSNSで伝えるケースが多いように感じる

・感染した人(あるいは家族)が「親しい」と考えている人に相談している場合もある(相手方がそう思っているかどうかは別として)

→ 感染した人(あるいは家族)から伝えられた情報が拡散するのかどうかは、情報をもらった「人」に委ねられている

→ 電話やグループLINEなどのSNSで一気に拡がる

今起きていることが自分と関わりがあるか

ないらしい → 他人ごとor興味の対象

すごくある



・自らの安全を確認し、
安心したい
→ 科学的な妥当性
の有無にかかわりなく、
「PCR」検査を求める

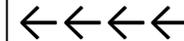
あるかもしれない



・どうやったら安全な領域(場所など)に自分をおけるのか
①安全ではない領域を知りたい
→ どの誰や!
②安全にしてもらいたい
→ 自分の行動エリアから
「切り離せ」「取り除け」!

+

「あるかもしれない」
にならないための努力



戦うか逃げるかすくむか反応(fight-or-flight-or-freeze response)

「そこにいたらうつる」(時間に関係なく)

これは必ずしも「空気感染」とイコールではない
その場所がけがされている「ケガレ」意識とも関係している
(穢れたものは禊ぎをしなければ取り除けない)
ただし「空気感染」を否定すると、ある程度収まる
→ 適正な知識の付与は重要

まとめにならないまとめ(1)

- ・理解を超える事象には、本能が反応する(準備がないと、「考えること」による解決は期待しにくい)
- ・戦うか逃げるかすくむか反応(fight-or-flight-or-freeze response)
- ・第1波の事態は「神戸エイズパニック」の時と、何ひとつ変わっていない。平成8年の腸管出血性大腸菌感染症、平成21年の新型インフルエンザ、平成26年のデング熱など、大規模感染症が発生するたびに、日本ではパニックを繰り返してきている
- ・日本では他の国よりも「新型コロナウイルスに感染するのは自己責任」と考える人が多いという研究もある。そのため、「場」と「行動」についての啓発にあたっては注意が必要(そんなところに行くのがわるい、自分はそういうところにも行かないし、そういう行動もとらないから関係ない、となる。
- ・日常生活で関係が出てくるフェーズになると「みんなと一緒にのこをした、かかったら運が悪かったのだ」と、行動への評価を回避しようとする
- ・しかし、適正な知識を知らないで、感染してしまうのは避けたい

まとめにならないまとめ(2)

- ・人は絶対を求めるが多くの判断は相対(比較)を根拠
- ・知識を適正に伝えるには、それなりの時間と工夫、そして労力を要する(啓発は簡単ではない)
- ・しかし、そこから切り取られた断片が流布する場合も多い。また、多くの人は長い説明を欲しない
- ・とって、短いフレーズで正確に知識を伝えられるわけではない
例)「ライブハウス」「夜の街」「飲食店」「三密」
- ・価値付けしない情報提供が必要だが、情報が伝わる過程で価値付けされてしまう
- ・われわれは「Yes/No」に慣れ親しんでいるし、多くの教育現場(学校、社会)でその手法もとられる。しかし、伝えるべき知識には「100%or0%」と確率的なものが混在している
- ・公的情報は、科学的正確さ(確率論、リスク)や各方面への配慮をするが、それ故にどうしても内容が複雑で歯切れが悪くなる
- ・公的情報よりもSNSや口コミを信じる(わかりやすく直接的)
- ・行動への働きかけの難しさと、環境への働きかけの必要性 8



ご静聴ありがとうございました

